

題　　言

北海道立衛生研究所報第19集を各位のお手許に届けることが出来て非常にうれしく思う。

顧みれば、昨年は明治並びに開道100年の記念すべき歳で、両陛下の御臨席を仰いで挙行された盛大な記念式典を始めとして諸種の行事が催される等、道内は祭典ムードに満ち、道民の心も何となく落着きを失いがちであった。本19集はそうした中にあってわが研究所の所員各位が夫々担当の調査研究に専念した結果の集積である。掲載報告数は46篇に達し前18集の50%増ともなり過去の最高を示しており、誠に開道100年を祝福するに相応しい道民への贈り物でもあると自負している次第である。内容的には疫学に関するもの14篇、食品科学及び薬学に関するもの夫々8篇、公害12篇及び生活科学4篇で、昨集の如く内容がある部門に偏った嫌いがあった誹りを改め得たものと信じている。

そもそも衛生研究所の使命は北海道の衛生行政に科学的基礎を提供することであり、本集所載の報告は何れも本道の衛生行政に多少の寄与をなすものと信じているが、果して各位のご満足を頂けたか否か、忌憚のないご叱正を願ってやまない。

たまたま本年は、当研究所創立20周年の意義深い年であり記念祝賀会等各種の催しをとの声もあるが、実は次に述べる問題を抱えているため、そこまで手を伸ばし得ない実情にある。当研究所が現在地に移転以来僅か、7、8年を経過したばかりにも拘らず、既に狹少度が深まり業務にも支障を来している現状であり、加えて札幌市の発展のため却って現在地が研究に適した環境とは言えなくなった。秘かに適地への移転を考えていたところ、思わざる好機が到来した。既に道理事者のお許しを得、改築移転の調査費、設計費は道議会を通過し、近日中には敷地も決定されるであろう。明後年度には新庁舎への引越しが実現されるものと明るい希望を持っている次第である。

しかしそのためには、「古い皮袋に盛った新酒」であってはならない。本道衛生行政の将来に合致した精密な調査研究の出来る、無駄のない、しかも能率の高い将来に対する諸々の vision を盛りこんだ研究所でなければならない。そのためには、建物の設計、研究所の機構、研究調査に従事する者の三者間に齟齬があつてはならない。就中所員一同の旧習墨守を改める必要も痛感している。

幸いわが研究所は創立以来、道理事者、道議会議員、その他各関係方面の深いご理解とご指導ご鞭撻によって逐年順調な歩みを続けて来た。今こそ所員は奮起一番、先輩諸兄の築いた当研究所の名声をさらに一層さん然たるものになるよう不斷の努力を惜んではならない。関係各位におかれても、吾々の意図を汲まれて今後共温いご支援を賜りますよう切にお願い致す次第である。

昭和44年6月

北海道立衛生研究所長

安　　保　　寿